

天然サカキに着目

国産の販路開拓次々と

列島最前線

各地の話題



東京・青梅市 (株)彩の榊

東京都青梅市の(株)彩の榊は神棚のお供えや神事に使うサカキをビジネスにする。3年前に会社を立ち上げると野山に自生する天然サカキを主軸に次々と販路を開拓。年商は現在2400万円だが、中国産が9割を占める市場を「国産で奪還する」のが夢だ。就農から経営を軌道に乗せるまでの間、農業会議や地元農業委員が支援した。

れでまたお客様に喜んでもらえる」と相好を崩す。

サカキとの出会いは5年前。墓参帰りの山道で群生を見つけた。すると両親の経営する生花店で働いていた時に中国産サカキを受け取った客から

「偽物売りつけやがって」となじられた記憶がよみがえった。独立を目前に指し修行していた生花店が月2千束も国産サカキを売っていたことも生業にするのを後押しした。荷を解くと歓声が上が

採取面積は約1千ヘクタール 所有者と何度も交渉 売り先探しにも苦労



選別作業をする社員とともに

市町の山、約1千畝で採取する天然サカキを中心に、畑22畝での栽培物、地元を始め三宅島や茨城県から仕入れたサカキを玉串や造り榊などにして販売。今年度からはメガソーラー(太陽光発電)会社などと連携し、パネ

と入った注文も想定した売値をはるかに下回った。家賃滞納など一時は生活にも困窮した。しかしその後徐々に買い手が増え、現在は近隣3500万円を見込む。

地元支援で軌道

国産シェア奪還が夢

社員6人、パート3人を雇用するほか、茨城県内の障がい者就労支援施設に一部選別作業などを委託。地域雇用を生み出すとともに、社会福祉にも力を尽くす。

「まったくの素人だった。加藤信也さんや農業会議が農地の確保や法人設立・運営、さらには売り先の紹介などで同社を常に支援してくれたという。彩の榊は現在、サカキのほかシキミやユーカリ、真竹、シダ類なども